



# 元気通信

ブダペスト日本人学校

学校だより

平成27年11月27日号

## 【学校長所感】(学校長) ドナウ祭 —スパイラルに学校行事を繋ぐ—

11月14日(土)、多くの方々のご支援ご協力の下、ドナウ祭を盛大に開催することができました。厚く御礼申し上げます。また、保護者の皆様にはご参集、応援頂きまして誠に有り難うございました。

さて、今年のドナウ祭は如何でしたでしょうか。開会式挨拶の中でも触れましたように、今年から「各学校行事の成果と課題を繋ぐ」取り組みを行っております。9月に行われましたふれあい大運動会の課題であった「努力・協力」に加え、「笑顔」をキーワードとし、今回のスローガンが決定致しました。皆さんもご存じのように、学校行事にはそれぞれの「めあて」があります。その「めあて」が異なれば、成果と課題を繋ぐことは難しいのではないかと、少し心配をしておりました。しかし、それも取り越し苦労でした。

先日行われました振り返り朝会での一コマをご紹介します。小学部2年生児童の発言です。

「僕は三つのキーワードのうち、『笑顔』を一番大事にした。だから、そのことを心がけて演技しようと、目標を持って臨んだが、緊張のあまりそれができなかった。」

この児童は、三つをキーワードとする課題に対して、自分なりに消化・解釈し、自分にとって何が課題かを考えた結果、上記のような目標を決めたのです。このように主体的に関ろうとすることが「学校行事をスパイラルに繋ぐ」原動力となり、何にも増して大切にすべき事柄ではないかと考えています。次のもちつきカルタ大会は、今回の課題を子供達一人ひとりがどのように消化し、活かしてくれるか楽しみです。もちろん、成果についても同様です。

## ※お詫び※

ドナウ祭の練習、準備などの忙しさにかまけて、保護者の皆様にドナウ祭のご案内状をお渡しするのが抜け落ちてしまいました。大変申し訳ありませんでした。お詫び申し上げます。また、例年案内状には案内図も掲載されておりましたので、ご迷惑をおかけしたと思います。重ねてお詫び申し上げます。

## 【ドナウ祭を終えて】(ドナウ祭担当 佐々木・原田)

先日のドナウ祭は、保護者の皆様をはじめ、大勢の方々のご参加の下、盛大のうちに幕を閉じることができました。準備の段階から当日に至るまで、保護者の皆様におかれましては、種々ご支援いただき本当にありがとうございました。

子どもたちは、本番に向けて学年ごとにめあてをもって取り組んできました。本番での子どもたちの姿を見て、保護者の皆様から、「子どもたちの笑顔が印象的だった。」という感想をたくさんいただきました。緊張した中でも子どもたちの笑顔が伝わっていたこと、とてもうれしく思いました。



ドナウ祭で達成感を味わった子どもたちですが、19日(木)に全校児童で振り返りをしました。「準備から片づけまで意識してできた。」「みんなで協力して楽しむことに重点をおいて取り組むことができた。」と成果を感じさせる良い意見がたくさん出ましたが、一方で「決まった人ばかりが動いていて、全員で動くことができなかった」という課題もありました。最後に、「ドナウ祭で出た課題は、次のもちつきカルタ大会に活かして、よりよい行事を作っていきます。」という実行委員長からの言葉がありました。その言葉を胸に、もちつきカルタ大会ではさらに心の花に輝きが増すように全校で取り組みましょう。楽しみにしています。

### 【B J Sランチ】(児童生徒会担当 林田・佐藤)

今回は、1つの班の中で5年生以上と4年生以下に分かれて、それぞれが自分の班とは違う4年生以下・5年生以上の子と一緒に組み合わせで食べました。いつもの清掃班のメンバーとは違い、少し緊張気味のグループもあれば、全くそれを感じさせないグループもありました。ドナウ祭の話やみんなでレクをするか・しないかなどのお話をしながら、どの班も楽しそうに食べていました。中には、校長室で食べているグループを羨ましがるとの声も聞かれました。メンバーの入れ替えだけでなく、ちょっといつもとは違った場所で食べられる楽しさもB J Sランチにはあることがわかりました。



### 【国際交流祭への出演について】(太鼓部顧問・中学部担任一同)

11月28日(土)・29日(日)にNHK文化センター主催の「第29回国際交流祭 inブダペスト」が5区にあります。本校にも参加の打診をいただき、和太鼓部と中学部が参加することになりました。会場はコンサートホール2階舞台会場です。ここまでの取り組みを発揮できるように、落ち着いて本番に臨んでくれることを期待しています。



### 【授業研究④ 6年生道徳】(授業者 仲川 教科領域主任 甘利)

今回の研究授業は、仲川がT1、林田がT2となり、小学部6年生の道徳を行いました。「誠実さ」をテーマに「手品師」という教材を使い、主人公の売れない手品師が、大劇場に出られるチャンスと、貧しい男の子に手品を見せる約束との狭間で迷い・決断する場面を通して、主人公の気持ちを考えました。

紙芝居形式にして物語の続きを見せる前に考えて話し合う活動を行い、皆の意見が出揃ってから手品師が男の子との約束を選んだ場面を見せ、手品師がそちらを選んだ理由と、そのような生き方の良いところを考えました。話し合いでは、お互いの考えを交流しながら、自分の意見を確かめたり、理由を付け加えたりする場面が見られました。「約束は絶対守る」「楽しみにしている男の子を元気づけたい」「人のために生きる手品師はすごい」など約束や思いやりを大切に思う子どもたちの気持ちがよく表れた結果となりました。

授業を振り返ってみて、手品師の葛藤場面での2つの選択にもう少し時間を取り、深く考えさせる手立てが必要であったと反省しています。(仲川)

今回の研究授業では、子どもたちの中に「いかに話し合う必然性を生んでいくか」が大きなテーマでした。単純に正解・不正解を問うような課題ではなく、どの考えにも一理あるという課題に出会わせることで、このテーマに迫ろうとしました。

事実、子どもたちは、手品師の心の揺れを敏感に感じ取り、大劇場と少年との約束で、どちらを選択すべきか迷う姿がありました。そこでは、「～さんはどう思う?」「他の考えはある?」と、自ら友達の考えを聞きに行く子どもたちの姿がありました。授業者の意図通り、課題の質が子どもたちの学び合おうとする意欲を高めました。しかし、「学びを深める」ことには至りませんでした。

事後検討会では、自分とは「違う立場の考え」の価値について、子どもたちが十分認識できていなかったことがその要因としてあったのではないかという意見が出されました。

授業者の上述のように、課題をとらえさせる時点で、もっとお互いの考えを聞き合い、それぞれの価値を十分に認識させていけば、学び深める姿につながっていったかもしれません。

次回は、これまでの研究の成果をもとに、ブダペスト日本人学校型授業プラン(2015年度版)として、2月に研究のまとめの授業を行います。これまでの我々の授業研究の成果が、日々の授業に生かされ、さらに2016年度の本校の研究へとつながっていくよう、精進してまいります。